



発行日 2007年4月25日 発行人 福島伸悦

編集責任者 浅井宣亮 編集担当 菅原研洲 編集委員 亀野 館盛 太田 内山

発行所 SOTO禅インターナショナル事務局 〒233-0012 神奈川県横浜市港南区上永谷5-1-3 貞昌院内

Tel. 045-843-8852 Fax. 045-843-8864 URL: <http://www.soto-zen.net/>

郵便振替 00100-6-611195 SOTO禅インターナショナル

Vol.34



CONTENTS

●巻頭	「人・情報・縁 一運動から行動へー 二期目にあたって」	・ SOTO禅インターナショナル会長 福島 伸悦	1
●所信表明	「国際布教への熱き思い」	福島 伸悦	2
●特集	2007年度総会・講演会報告		
	講演録「ヨーロッパ国際布教の近況」	・ヨーロッパ国際布教総監 今村 源宗	4
	2007年度総会報告 議事録		8
	2006年度決算報告・2007年度予算報告		10
	2006年度事業報告・2007年度事業計画		12
	新執行部役員紹介		14
●会員投稿	「寺院でのフラスタジオ展開について」	・静岡県法幢寺 寺族 秋田 奈美	16
●国際布教支援金に関するご報告とお知らせ			18
●SZI通信	会費納入単・動静報告・ウェブサイト・ブログサイトの告知		19
●両大本山ワークショップ開催のお知らせ			20

巻 頭

人・情報・縁 一運動から行動へー
二期目にあたって

SZI会長 福島 伸悦



会長に就任して以来、「人・情報・縁 一運動から行動へー」を活動テーマに掲げ、SZIブランドの確立に向けて、スタッフと共に頑張って参りました。お蔭様で

人、つまりスタッフに恵まれ、個々の持ち味を発揮していただき、これまでの各会長さんのもとで積み上げてこられたものを具体的に事業として展開できたと思っております。

この度の総会におきまして、引き続き会長をお引き受けすることになりました。これまで同様皆様方の相変わらぬ御支援をお願い申し上げます。

さて、二期目にあたって取り組むべき方向性として次の三点を目指します。

第一に、会運営にあたりましては、トップダウンでなく多くの皆様からの声を拝聴し、第一線で布教活動に

あたっている国際布教師の皆様意向に沿えるようにできうことをお手伝いさせていただきます。と同時に、国内のご寺院をはじめ檀信徒の皆様にも国際布教の重要性を御理解いただくような啓蒙活動をしてまいりたいと思います。

第二に、時代の要請に応じて海外寺院の皆様にとって利用しやすい環境を提供します。成果重視の視点で評価を行い、よいプロジェクトについては資金、人材を重点的に配分し、成功が見込まれない場合は止めるという選択と集中を徹底します。

第三に、自らの活動を厳しく見直す会を目指します。事業執行体制を常に見直し、迅速化と効率化を両立させる組織運営を心がけていくつもりです。

SZIは両大本山、教化部国際課とも良好な関係を築きつつ、宗門の国際布教の一翼を担うべく、今後とも不断に努力してまいります。

2007年度 所信表明

国際布教への熱き思い

SOTO禅インターナショナル会長 福島伸悦

1 はじめに

曹洞宗の国際布教の歴史は、100年を超えました。一仏両祖の教えは、海外の地で着実に定着しつつあります。これもひとえに先達諸師の地道な種まきがようやく実を結んできたことの証であるといえます。

国が違い、年代が違い、人が違ってても、釈尊の教えの中心的なものは正しく伝わらなくてはなりません。達磨大師は釈尊の正法を中国の人たちに伝えるため、3年の歳月をかけ中国に渡来し、嵩山の少林寺に入り9年面壁坐禅をしました。

「おほよそ西天東地に仏法つたはるるというは、かならず坐禅のつたはるるなり。それ要機なるによりてなり。この坐禅の宗旨のみなり。この宗旨いまだ単伝せざるは仏祖にあらざるなり。」（『正法眼蔵』「坐禅箴」巻）

つまり、正伝の仏法とは坐禅を根本とします。故鈴木俊隆師、故片桐大忍師、故前角博雄師、故弟子丸泰仙師をはじめ、多くの国際布教師の方々の坐禅への熱い思いが今、全世界に広がっているのだと思います。私たちはそれらの熱き思いをしっかりと受け止めさせて頂かないといけないと思っています。

「稽古とは一より習い十を知り十よりかえるものの一」これは千利休の茶道の精神、点前作法の心得などを示したのですが、この言葉は茶道に限らず、すべてに通じる道理だと思います。はじめて一を習う時と、十から元の一に戻って、再び一を習う時と、その習う人の心は全く変わっているものです。

S Z I は今年で14年目になるわけですが、今一度設立当時に返って、はじめの「一」にこだわり、また、「只今の一」にこだわり、事業展開をしていかなければと決意を新たにしております。

2 SOTO禅インターナショナル設立の目的

1991年（平成3年）教化部の中に国際課が設置され、ようやく宗門としての国際布教に対して本腰を入れて取り組む姿勢がうかがえるようになったといっていいいでしょう。

このような状況の中で、1993年（平成5年）、国際布教師支援を目的にS Z I が設立されました。実際は、その2年前から設立に向けての準備委員会が発足した

経緯があります。

設立の第一の目的は、国際布教師に対しての経済的支援です。その背景には、国際布教師は日本からの経済支援もなく、家族の生活を心配しながら布教活動を行っていた実態があったということです。日本の寺院であれば檀家制度に護られ、葬儀・法要などによる収入があります。そして、托鉢でも随喜でもすれば、貧しくてもそれなりに生活ができる環境があります。しかし、海外の寺院は、法律も違えば、運営方法も違うため、当然、布教師の行動範囲も狭まれ、医療保険にも加入できず、生活保護を受けるような経済状態でした。

「学道の人先づすべからく貧なるべし。」とはいっても、生活環境が違うわけですから、「貧」もほどほどでなければならぬと思います。ですから、経済的、精神的の両面の支援は本当にありがたいものです。

第二の目的は、国際布教の問題を宗門全体の問題として考えていただくような啓蒙運動を展開することでした。国際布教の必要性を多くのご寺院方に理解していただくためには、どんなかたちであれ、まず海外にある曹洞宗寺院の活動について知ってもらわなくてはなりません。そうすることによって宗門の中の国際化をダイナミックに進めることができると考えたからです。

第三の目的は、禅の国際化が叫ばれる中、国内外の情報を収集し、会報などで紹介し、支援者を募り、そのネットワークを作ることでした。そして、現場の意見を尊重し、国際布教の明確なビジョンが示すことができるシンクタンクとしての活動することでした。

以上のような目的を持ってS Z I は設立されたわけで





総会にて ティクナットハン師・国際課・S Z I スタッフ
5 May 1995



ハワイ開教100周年行事にて S Z I スタッフ一同
24-26 Oct 2003

すが、この間、宗門の国際布教に対する状況も変化してまいりました。それに合わせて我々の事業・活動も少しずつ変化してきていますが、現地の声を反映できるような活動を具体的に展開していくことが課せられた役目だと認識しております。

3 今後の具体的事業展開と展望について

現在、4つのプロジェクトが継続され、副会長さんにそのプロジェクトの委員長をお願いし推進しています。

- 1) **情報収集特別委員会**・・・この会は、会報委員会とS Z I ホームページ委員会からなります。会報委員会は、国内外の情報を収集し会報で発信をし、多くの方に国際布教の御理解をいただきます。ホームページ委員会は、誰もが自由な情報の発信・共有を通じて、個々の能力を創造的かつ最大限に発揮できるようにしています。
- 2) **国際布教支援積立金運営委員会**・・・国際布教支援金の拠出に関する運営と選考にあたります。曹洞宗の国際布教事業に対する内外の寺院、団体、個人を対象としたもので、昨年から年額100万円を限度として支援するよう運用細目も定め、実施しております。
- 3) **海外ガイドブック編纂委員会**・・・基本として寺院名鑑に登録されている海外寺院を紹介するガイドブックの編纂です。昨年の事業でしたが、アンケートが思うように集まらないので遅れていますが、国際課のお手伝いをいただいて夏までには終えたいと思います。
- 4) **国際布教師OB連絡会**・・・国際布教師OB連絡会を設立し、各布教区での情報、あるいは人的ネットワークの構築を目的としています。S Z I の更なるネットワーク作りの拠点にしたいということです。

宗門の国際布教に対する取り組みは、前向きに一步一步前進しているとは思いますが、まだまだ関係者のみの関心ごとで終わっていることは否めません。国内のことをしっかりやるべきというご意見もあるようですが、グローバル社会となった今、国内のことだけを考えている時代ではありません。国内の諸問題も海外寺院の運営を参考にすることで解決できることもあるように思います。国際布教を自分たちのことと捉えることによって、国内の布教も相乗効果をもたらす結果になるのではないのでしょうか。

宗門に於いて私たちの会はあくまでも任意団体ですが、しっかりした目的意識を持った健全な会だと自認しております。国の行政もそうですが補助金をたくさんいただいている団体はある意味でステータスを持ち、認められている証と見られていますが、本来は自立していれば補助金もいらないはずです。我々の会は、まだまだそこまでは至っていませんが、自立と責任というものを意識し、健全で透明性のある会運営を心がけたいと思います。

そして、具体的には継続事業のガイドブック編纂、国際布教師OB連絡会の設立に加えて、是非「海外伝道史」を顕彰する必要性を訴えていきたいと思っています。1980年に出版された『曹洞宗海外開教伝道史』が差別図書として回収・廃棄されたため、現在、宗門には「海外伝道史」を顕彰する手段がありません。この「海外伝道史」を新しく編纂するか、あるいは再編集し復刻するかは、宗務当局の判断によるものですが、国際布教にかかわった一人として、また国際布教応援団のS Z I として呼びかけていきたいと思っています。

今年は、ヨーロッパ国際布教総監部創立40周年で、6月には記念行事もあり、宗門として更なる展開が期待されます。私たちは、これからもS Z I の特色を前面に出し、情報発信し、国際布教の応援団となっていきたいと思っています。

「ヨーロッパ国際布教の近況」要旨

ヨーロッパ国際布教総監 今村源宗 老師

1. ヨーロッパ国際布教総監部が
イタリア・ミラノよりフランス・パリに移転

昨年の秋、以前からの懸案であったヨーロッパ国際布教総監部がフランス・パリ市へ移転することができた。フランスの法務省へ非営利協会法（1901年法）に基づき認可申請を行い、年末までに認可の告報がもたらされ、どうにか立ち上げることができ嬉しいかぎりである。

ヨーロッパはEUに統合されているため、パリに移転しても活動に支障はない。しかし、言語がイタリア語からフランス語に変わることで、また、ミラノは徒歩で事務所に通っていたのが、パリでは地下鉄で事務所に通うことになった。地下鉄での出勤はラッシュ・アワーの時間帯になるため困難も多いが、移転の初日からフランス語でのコミュニケーションを強いられるのでこの歳でフランス語の会話もしなければならぬ。

地下鉄で通勤していると「すみません」「お願いします」「ありがとう」という言葉が頻繁に聞かれる。イタリアでは「すみません」「お願いします」「ありがとう」という言葉をほとんど聞かなかった。イタリアとフランスの国柄の違いも感じられて面白い。

2. ヨーロッパ布教の歴史

「なぜ、ヨーロッパの総監部がミラノにあるのか？」とよく訊かれるが、どう答えてよいか困っていた。しかし、ヨーロッパ国際布教の歴史について考えるきっかけとなった。

(1) 「開教」という言葉について

私は「開教」という言葉が好きではない。何年前かに教学の立場から国際布教審議会（当時開教審議会）の専門委員に選ばれた。当時の委員は瀧澤和夫現教化部長、横山泰賢師、そして宗務庁から何名かがいた。そこで、「開教」という言葉を改めるべきかどうか、また、国際布教の理念についての定義付けについての審議を行った。

私は「開教」の概念そのものがおかまじいと思っていた。釈尊の開教（転法輪）はあっても、我々が開教

するということはない。なぜなら法はすでにあるからである。道元禅師は宋（中国）からの帰国後すぐに記した『弁道話』の中で「弘法」という言葉を用いている。瑩山禅師には「救世」という言葉がある。高祖様も太祖様もどちらも、それらを誓願としている。

瑩山禅師は19歳のときに、誰一人として救

われない人がいないほどの大悲でもって救世をしようという誓いを宝慶寺における寂円禅師のもとで行っている。また、50歳を過ぎて改めて永光寺において誓願したといわれている。

自らが宗門の一員となって働くということは、両祖様と同じような思いで国内においても、海外においても、布教・教化・敷衍していくことだと考えている。

(2) 弟子丸泰仙老師

1967年に弟子丸師がパリにおいでになり、ヨーロッパで初めて実践的な坐禅を行い、そして驚異的な拡大と敷衍がなされた。ヨーロッパでの活動を始めてから5～6年後、弟子丸師が金沢市大乘寺に拝登されたときに、丁度私も大乘寺におり、そのとき弟子丸師は「ヨーロッパに真の坐禅を伝えようと思う」「今、造っているお寺は『大乘禅寺』という名前にしようと思っている」と話していた。そして「今、私の門下生は3万人いる」とも言っていた。

当時の総長、参議であった大島老師、田辺老師は、直接フランスの状況をご覧になり、弟子丸師をヨーロッパ開教総監にする必要性を感じられた。しかし、当時、弟子丸師は無資格の上座分限であったため、宗門も様々な方策をたて、彼も忙しい最中であつたにも関わらず、永平寺安居を昭和52～3年に行い、山田霊林禅師から嗣法を受けた。そして、初代のヨーロッパ開教総監に任



命され、宗門はパリの仏国寺に総監部を置いた。大乘禅寺は今の禅道尼苑である。

今回の総監部移転までに20年ほどの隔世があるが、フランスの中心であるパリ、それはヨーロッパの中心ということでもある。そのパリで宗門の実践・教化・伝道が始動した。今回、総監部が移転したということもある意味では本来あるべき場所に戻ったということであろうと思っている。

しかし、弟子丸師は活動が始動してから数年後、68歳で遷化されたため、その大志は多少の分裂をしながら消え果てようとしていた。弟子丸師の直接の弟子は登録された者が数10人以上であったと思う。未登録の者を含めれば約400人はいた。これらの人たちが、弟子丸師の遷化後、新たな師を求めて日本に來たり、あるいは現地に留まって独立して活動したりしていた。彼らは自分なりに弟子丸師の教え、只管打坐の実践を黙々と行い、伝えてきた。そして、その底流は今日まで脈々と継続しているのである。

弟子丸師の活動は宗門から見れば一時的に華やかに、花火のように打ち上げられて、消えたと思われていたのかもしれない。大部分の人たちはヨーロッパの只管打坐とその実践者の存在を忘れていたのかもしれない。ヨーロッパの状況がまったく分からないまま、手を触れないまま20数年が過ぎていた。

1999年8月から10月にかけて宗門の命によって、加藤秀典師と横山泰賢師が70日間に亘ってヨーロッパの現地調査を行った。その調査によって、現地の人たちは宗門から取り残されている現状を改善したいと望んでいることが判った。2003年の高祖大師750回大遠忌を契機として、少しでも現地の人たちを支援し、擁護し、活動を共にしていこうという気運が盛り上がり、大遠忌の予修法要をはじめとして、その後、準備室を立上げ、さらにヨーロッパ開教総監部（現国際布教総監部）の再設

というところまできた。

総監部を再設するとき、場所的なものとして、パリ、ジュネーブ、ミラノの候補地が挙げられ、当時の人間関係・経済的なものも考慮し、ミラノに総監部が再設された。

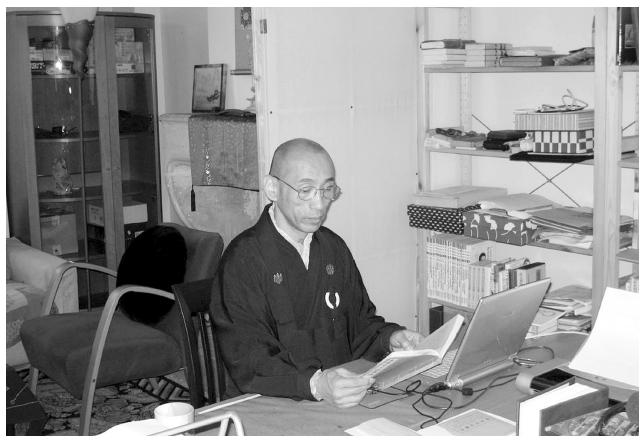
3. ヨーロッパ国際布教の近況

（1）ヨーロッパでの活動

私は2004年にヨーロッパ国際布教総監に就任して、すぐに各地の道場を訪れ、改めて実情や希望などの意見交換を行ってきた。ヨーロッパにおける只管打坐の実践者たちは、日本の曹洞宗という宗門からの正直で正確な伝達者・連絡者を必要としていた。その上で、日本曹洞宗の伝統の重みを真摯に学びたいと思っている。しかし、伝統とはいっても、単なる儀礼・儀式・お作法の習い事をしたいと思っているのではない。よりシンプルな、スタンダードな教義の裏付けのなされるものは学んでいこうという志を、むしろアメリカよりもしっかりと抱いていると感じる。そういう意味で只管打坐の伝統を変えようとはしないし、他の系統の教えに混在しようとはしていない。そのことを私たちは尊重してゆくべきであろう。

私はそのため、翌年から全ヨーロッパの国際布教師・伝道教師の研修会を年1回開催することとした。あくまで、国内における現職研修会のつもりであるが、テーマは各人の希望を聴いて決めている。第1回は「亡僧・檀信徒葬儀法について」の研修を行った。ヨーロッパはハワイ、北アメリカ、南アメリカと異なり、日系人に対する布教教化から始まったという歴史がない。しかし、坐禅のメンバーや弟子、信徒は、仏教の教義に深く関心を寄せるに従って、現実的な問題としてメンバーの高齢化に伴う、メンバーやその家族の死があって、それらに直面したときに、せつかく心を寄せた禅、仏教の教え





執務中の今村総監老師

の中における葬儀・葬送を希望する人が増えている。しかも、その方法は、必要のないものとして師から何も教わっていない。また、師から不必要なものと教えられてきたような節もあるが、実際には必要とされてきている。そのため、「葬儀法」についての研修会を実施し、英語・フランス語・イタリア語のテキストを作成し、配付した。

2006年度の研修会は、「伝戒・伝法について」の講習を行った。私も関わっていたが、宗務庁において教学審議会の専門部会として、伝法の儀軌本の改訂、基本的な進退作法、三物の書き方など分かりやすい伝法の仕方の検討が行われ、昨年春に発行された。ヨーロッパでは40名の参加者とともに昨年10月にこの新しい儀軌本をテキストとして講習会を行った。4月までには英語・フランス語・イタリア語のテキストを作成し配付する予定でいる。現在は最終校正を行っている。来年度は将来を見越して「晋山・結制法について」を行いたいと思っている。2007年度の教化資料として「宗侶必携」の海外版を作ろうとも思っている。

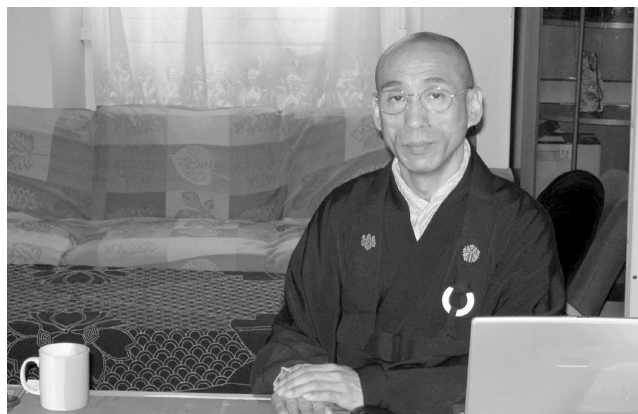
アメリカでも同様だが、『曹洞宗宗制』『行持軌範』の英語版が十分に出来上がっていない。分断的な翻訳は少しずつ進んでいるようだが、今日的に考えると、説明責任を果たさぬということは、いずれ宗門の責任を問われる問題になりかねないとも思うので、早い時期の完成を期待している。

改めて考えると、教育について、従来の日本の基準に契うような宗侶養成を声高にいうよりも、ヨーロッパで現に活動している人たちの長年の苦勞に答えてゆくことから始めるべきであろう。意見を十分に聴いて、正確に宗門に投げ返し、宗門からもたらされる答えを正直に説明していくことの必要性があるだろう。私はそういうことに残された任期を努めてゆこうと思っている。

宗門の大きな課題として、日本人の宗侶から得度を受けた外国籍の僧侶は、日本に僧籍があるため日本の

僧堂に安居できる。しかし、母国に帰国し独立した後も、諸々の申請は師僧の所属する宗務所長の奥書が必要となるのが不便である。また、日本の師僧が存命の間はよいが、世代交代がおこなわれ、相互の理解を得ることが出来ないときには、日本側から見捨てられることになってしまう。あるいは、海外の次の世代の人たちは、海外のそれぞれの僧侶から得度を受けることとなるが、その人たちの僧籍は教学部に属さず、教化部に属する。教化部に属した者は外国籍の海外僧侶として登録され、教化部の所轄となり、僧籍地がないために、日本国内の僧堂に安居することはできない。外国籍の宗侶は長年、このような二重構造の中で苦悩してきた。その格差の是正を私は何年にもわたって申し上げている。徐々に改善がみられていくことと希望的に思っているが、これは、ただ一つの部の問題ではなく、宗門全体の制度の見直し、審議を経なければならない。現在も審議がなされていることと思うが、これらに携わる人たちに希望を寄せたいと思う。一時もそれぞれの海外の現実の進行に、宗制の遅れをきたさないように、宗門の制度や伝統を守りつつも十分な配慮を見せて、さらなる海外の発展を目指して頂きたい。これは海外の発展ということだけではなく、将来的には海外の宗侶の活動は、日本の宗侶の活動と合わせ鏡となり、私たちの宗門にさらなる進展をもたらすことになるであろうと期待しているのである。

私は20年以上、僧堂において多くの若い宗侶と生活を共にし、いろいろな思いを受け止め苦樂を共有してきた。過去においても、現在においても、未来においても、宗門の有りさまに一度も絶望したことはない。宗侶に対し誰一人、絶望したことはない。「人人ことごとく道器」という言葉があるが、法は当然、洋の東西南北・言語などを問わない。誰でも坐禅の実践は行える。そして、尊い只管打坐に正直に暮らしている人たちの集団である。今、ご縁があってヨーロッパの地にいるからは、その人たちの思いを思いとして、一人ひとりを、希望を持って、



ヨーロッパ布教総監部にて

大切な両祖の児孫として、お互いに坐禅をさせていただくご縁に恵まれているということを尊んで、活動をしていきたい。

(2)「行」と「学」の充実

2月：スペイン・バレンシア和光禅寺 眼蔵会

「現成公案」提唱

3月：フランス・パリ仏国寺 「坐禅儀」提唱

4月：ドイツ・ハンブルグ寂光寺 「坐禅箴」提唱

5月：イタリア・サルサマジョーレ普伝寺

「晋山式作法」「香語の作り方」

6月：オランダ・禅川寺 「伝光録」提唱

10月：伝戒・伝法・三物の作法・口訣についての講習

11月：フランス・リモージュ観照寺 「弁道話」提唱

4. 質疑応答

Q：(山本健善師)

1967年に初代ヨーロッパ開教総監として弟子丸泰仙老師がヨーロッパに渡ったことを、ヨーロッパの曹洞宗の歴史の第一歩として考えて、今年迎える40周年と考えてよいのか？

A：近代の仏教学の歴史では100年以上前から研究のために日本仏教の僧侶はフランスやドイツなどヨーロッパに来ていた。しかし、鈴木大拙老師以降、実践としての坐禅・宗門の布教の第一歩を1967年と位置づけて、今年40周年としている。6月8・9・10日に記念のシンポジウム、功績のあった人のための追悼法要などを企画している。

Q：(山本健善師)

弟子丸老師は日本の禅を、形式化した、退化した、墮落した、活動的でないという批判の上に立ち、ヨーロッパでは真の禅の実践を行っていると言主張していた。中には宣伝が行き届き、一般紙にも「禅のセールスマン」と少し批判めいたことも書かれていた。弟子丸老師も日本の仏教者に対しても喝を入れるような発言をしていた。

しかし、この頃のヨーロッパの宗侶の方々も形式・伝統に気持ちが動きすぎているのではないのか？弟子丸老師は大きな課題を後世の私たちに残している。その課題に宗門はまだ答えられていないのではないのか？

A：弟子丸老師の課題に対する答えはまだ出ていな

いと思う。

弟子丸老師には良い部分と悪い部分があると思う。弟子丸老師は良くも悪くも宗門の伝統を知らずに、ただ坐禅をするということだけでヨーロッパに来た。

昨年4月にパリにおいて、私が「ただリラクゼーションの坐禅ではいけない。ただ気持ちが落ち着くという坐禅ではなく、長年坐禅をしてきたからには仏祖の坐禅ということを中心にしなければいけない。このことが最終的に皆様の課題になる。」と言うと、或る人は「弟子丸先生はそのようなことは言っていない。気持ちの良い坐禅で良いと言っていた。」との返答だった。

私は「これは、弟子丸老師が当時だから言ったことで、もし弟子丸老師が70歳、80歳と時を経たならば、おそらく違うことを言っていたと思う。それは時が言わせた言葉ではないかと思う。」と言いました。そう思います。

ヨーロッパの国際布教師、伝道教師は日本の儀礼的なものについて何も教えられていない、伝えられていないのだから、それらについて知りたいと思うのは当然の要求である。たとえば、日本において将来おそれることであるが、儀礼が盛んになるほど、教義が廃れるという様相が現出するようであれば、儀礼・儀式ばかりを学ばないで欲しいと思う。しかし、教義の裏付けのある、シンプルな儀礼は当然習得する価値はあると思う。ヨーロッパにおいて、キリスト教の儀礼文化に対する批判から仏教徒になったり、坐禅をしたりしている人が多くなっているという見方もあるが、それだけをすべての理由とするのは間違いであろう。



質問する山本健善師

2007年度 S Z I 総会報告

S Z I 事務局 館 盛 寛 行

瀧澤和夫教化部長挨拶

S Z I 創立以来14年。創立当初から参加させていただきました。S Z I は当初、開教師支援が目的であったと思います。そして、その流れが今日まで存続でき、多くの支持とともに全国から会費を頂けるのも、人に対する投資を行ってきたからだと思います。活動テーマにも「人・情報・縁 ー運動から行動へー」とあるように、物に対する投資ではなく、S Z I は人と



いうものを主軸におき、人というものを非常に大事にしてきました。そのことが、多くの方々からの信頼を得たのではないのでしょうか。国際布教支援金の運用も、人を第一に考えており、大変心強く思っております。

私も10数年、S Z I の会員として活動をさせていただきました。その活動を評価していただき、教化部にお仕事を頂いたものと思っております。そして、私自身も抜擢いただいたことにご期待を感じておりますし、自分自身の中でもお役に立てるよう頑張りたいと思っております。

今回、ますますの人材を得まして、さらなる発展を願うところです。内部にいたときは、役員の中だけでの集まりでものを考えがちになっていたと思っておりましたが、外から見ると、多くの方々の信頼得た、立派な活動をしている団体であることは間違いのないことであります。今後も国際布教に対するご支援をますます頂戴いたしまして、教化部国際課と連携を頂きまして、さらに曹洞宗の国際布教に対する貢献をお願い申し上げたいと思います。また、私もその同志の一人として頑張りたいと思っております。本日、2007年度総会を迎えられたことをお祝い申し上げます。

■ 総会議事

2007年2月14日、曹洞宗檀信徒会館において2007年度S Z I 総会・講演会・懇親会を開催いたしました。

総会は議長に群馬県長楽寺峯岸正典師を迎え、①2006年度事業報告、②2006年度活動日誌、③2006年度会計報告、④国際布教支援積立金運用報告、⑤役員改選、⑥2007年度事業計画、⑦2007年度予算計画等の議事を滞りなく進めることができました。議事の詳細につきましては、10頁以降の総会資料をご参照下さい(10～13頁参照)。なお、昨年度からの継続事業である『海外寺院ガイドブック』の発行を4月までに行いたいとの報告をいたしました。また、6月8日から10日にヨーロッパ国際布教40周年記念行事が予定されており、ツアー等支援・協力をしていくことが決まりました。

■ 質疑応答

会員様より「事務局の中に尼僧を入れることを検討して欲しい。」とのご提案をいただきました。本会の事務局は、会員として1年ほど共に活動する中で、本人も積極的に参加していきたいとの意思がある場合に事務局としてご助力いただく例が多くなっております。是非、尼僧の方々にも本会の活動にご理解を賜り、活動を共にしていただくことを期待しております。

■ 講演会

講演会ではヨーロッパ国際布教総監今村源宗老師をお迎えし「ヨーロッパ国際布教の近況」のご講演を賜りました(4頁参照)。現任の国際布教総監から直接ヨーロッパの現状を聴くことができるということもあり、田中良昭老師(曹洞宗総合研究センター所長)、羽仁素道老師、武田秀嗣老師、青山嶺雲老師、太田大穰老師、五十嵐卓三老師をはじめ、全国から61名という例年以上の参加がありました。

■ 懇親会

静岡県法幢寺の秋田弘隆師（本会布教審議委員）と奈美さんご夫妻をお迎えし、フラダンスの披露をいただき、ご詠歌の新曲「まごころに生きる」にあわせたフラダンスもを見せていただきました。弘隆師の「アロハ」の掛声で始まり、元ハワイ国際布教師の方々を中心にフラダンス講習会も実施されました（寺院でのフラダンス教室については会報16頁参照）。



■ ヨーロッパ国際布教40周年記念行事

このたび総会でご講演いただいた、今村源宗老師が総監をお勤めになっているヨーロッパ国際布教総監部では、40周年を記念した記念行事が以下の日程にて開催されます。ツアーの詳細は別紙を参照してください。

ヨーロッパ国際布教40周年記念行事＜案＞

平成19年6月8日（金）～ 6月10日（日）

フランス・ブロワ市・禅道尼苑にて

6月8日（金）

6時
振鈴・坐禅・朝課・朝食
午前
弟子丸泰仙初代国際布教総監
追悼法要（参同契、宝鏡三昧）
導師：国際布教総監
引続き
弟子丸老師回想と思い出
昼食
午後
40周年記念シンポジウム
第1部
「仏教の普遍性について1」
夕食
（歓迎の挨拶：国際禅協会会長）
ビデオ・フィルム上映会

6月9日（土）

6時
振鈴・坐禅・朝課・朝食
午前
ヨーロッパ国際布教功労者
追悼法要
（特為献供、大悲・参同契）
導師：宗務総長
記念撮影
40周年記念シンポジウム
第2部
「仏教の普遍性について2」
昼食
午後
40周年記念シンポジウム
第3部
「仏教の普遍性について3」
夕食晩餐会（教化部長挨拶）

6月10日（日）

6時
振鈴・坐禅・朝課・朝食
午前
40周年慶讃歎仏
導師：国際禅協会会長
主賛：国際布教総監
40周年記念シンポジウム
第4部
「パネルディスカッション」
司会：国際布教総監
昼餐会

SOTO禅インターナショナル 2006年度収支決算報告書

総収入金	5,835,537円
総支出金	4,388,147円
差引残高	1,447,390円

収入の部

2006年1月1日～2006年12月31日

項 目	本年度予算	本年度決算	増 減	備 考
会 費 収 入	2,800,000	2,810,000	10,000	年会費
事 業 収 入	300,000	184,000	△ 116,000	総会会費等
助 成 金	1,200,000	1,200,000	0	両大本山、宗務庁
雑 収 入	400,000	489,600	89,600	利子、添菜
支 援 積 立 金 取 崩	1,000,000	1,000,000	0	
繰 越 金	151,937	151,937	0	前期繰越金
計	5,851,937	5,835,537	△ 16,400	

支出の部

項 目	本年度予算	本年度決算	増 減	備 考
国際布教支援事業費	300,000	300,000	0	国際布教支援積立金
事 業 費	2,800,000	2,188,668	△ 611,332	総会、講演会、ゆめ観音、海外研修費等
印 刷 費	200,000	155,678	△ 44,322	各種印刷費
会 報 費	1,300,000	1,026,496	△ 273,504	会報印刷、発送費、会報担当費、原稿料
会 議 費	500,000	328,453	△ 171,547	各会議費、会議交通費支弁
事 務 費	300,000	171,697	△ 128,303	事務連絡費、消耗品費、振込手数料
通 信 費	200,000	174,300	△ 25,700	会報以外（総会報告等）の郵送費等
備 品 費	30,000	29,800	△ 200	
渉 外 費	40,000	13,055	△ 26,945	弔電、供花等
予 備 費	181,937	0	△ 181,937	
計	5,851,937	4,388,147	△ 1,463,790	

○ 国際布教支援積立金（定期貯金・前年度迄）	10,400,000円
（本年度積立）	300,000円
（本年度国際布教支援金）	△ 471,225円
（本年度取崩）	0円
（本年度累計額・定期貯金）	10,228,775円

上記の通り報告書を提出いたします
SOTO禅インターナショナル 会計 大谷 有為

2007年2月14日

監査の結果、上記の通り相違ありません
SOTO禅インターナショナル 監事 加藤 孝正 田宮 隆児

2007年2月1日

SOTO禅インターナショナル 2007年度収支予算書

総収入金 6,147,390円
 総支出金 6,147,390円
 差引残高 0円

収入の部

2007年1月1日～2007年12月31日

項 目	前年度予算	本年度予算	増 減	備 考
会 費 収 入	2,800,000	2,800,000	0	年会費
事 業 収 入	300,000	300,000	0	総会会費等
助 成 金	1,200,000	1,200,000	0	両大本山、宗務庁
雑 収 入	400,000	400,000	0	利子、添菜
支 援 積 立 金 取 崩	1,000,000	0	△ 1,000,000	
繰 越 金	151,937	1,447,390	1,295,453	前年度繰越金
計	5,851,937	6,147,390	295,453	

支出の部

項 目	前年度予算	本年度予算	増 減	備 考
国 際 布 教 支 援 事 業 費	300,000	500,000	200,000	国際布教支援積立金
事 業 費	2,800,000	3,000,000	200,000	総会、講演会、ゆめ観音、海外寺院ガイド作成費等
印 刷 費	200,000	200,000	0	各種印刷費
会 報 費	1,300,000	1,300,000	0	会報印刷、発送費、会報担当費、原稿料
会 議 費	500,000	500,000	0	各会議費、会議交通費支弁
事 務 費	300,000	300,000	0	事務連絡費、消耗品費、振込手数料
通 信 費	200,000	200,000	0	会報以外（総会報告等）の郵送費等
備 品 費	30,000	30,000	0	
渉 外 費	40,000	40,000	0	弔電、供花等
予 備 費	181,937	77,390	△ 104,547	
計	5,851,937	6,147,390	295,453	

○ 国際布教支援積立金（定期貯金・前年度迄）	10,228,775円
（本年度積立）	500,000円
（本年度国際布教支援金）	0円
（本年度取崩）	0円
（本年度累計額・定期貯金）	10,728,775円

* 国際布教支援積立金運用資金細目にに基づき取り崩す可能性があります

上記の通り予算書を提出いたします
 SOTO禅インターナショナル

2007年2月14日
 会 計 田宮 隆児

2006年度 S Z I 事業報告（2006年1月1日～12月31日）

★ 自己研鑽事業

『対話が世界を変える 聖エジディオ共同体』を講読
『日系人ヒューマンブック』を購読
役員各自ブログ開設・運営

★ 布教・協力支援事業

6月23日
講演会 講師 ブライアン・バークガフニ師 (大本山總持寺)
7月3日
内講 講師 町田宗鳳先生 (大本山永平寺)
7月10日～21日
熊本聖護寺・国際安居へ通訳・大谷師派遣 (熊本・聖護寺)
7月19日～20日
大本山永平寺主催「夏期大学」運営協力 (曹洞宗檀信徒会館)
9月7日～14日
ドイツ普門寺ツアー、諸行事協力 (ドイツ普門寺)
11月11日～12日
ハワイ・マウイ島満徳寺100周年行事参加 (マウイ島満徳寺)
布教支援金支給
2件 ①ブラジル・イピラス禅光寺
②アンヌ・道学・ボエラート師
海外寺院への仏具・法具を送る
ヨーロッパ・北アメリカ・南アメリカ各総監部宛

★ 海外・交流事業

9月2日
「第8回ゆめ観音 in 大船」 (大船観音寺)

★ 出版事業

S Z I 会報31号（4／25）、32号（8／20）、33号（12／25）
会報総集編 創刊号～33号 発行（12／25）
海外寺院ガイドブック情報収集・編集作業

★ 広報事業

S Z I ホームページの運営
ブログやEメールなどによる各事業の広報活動・情報提供

以 上

2007年度 S Z I 事業計画

活動テーマ＜ 人・情報・縁 →運動から行動へ＞

☆ 総会／講演会（事業終了）

- ・ 2月14日（水） 曹洞宗檀信徒会館（3F 蘭の間）
- ・ 講演会「ヨーロッパでの活動報告と理念」
／曹洞宗ヨーロッパ国際布教総監 今村源宗老師

☆ 兩大本山ワークショップ

- ・ 總持寺ワークショップ → 5月7日開催（会報最終ページ参照）
- ・ 永平寺ワークショップ → 5月8日開催（会報最終ページ参照）

☆ 熊本聖護寺国際安居通訳派遣

- ・ 5月から7月の雨安居期間に1～2回

☆ 各種行事人材派遣 / 交流

- ・ 夏期大学講座運営協力 7月27・28日

☆ 第9回ゆめ観音アジアフェスティバル

- ・ 9月8日（土） 12：00～20：00 大船観音にて

☆ ヨーロッパ布教40周年記念行事 支援・協力

- ・ 6月8日～10日 欧州各地にて（別紙旅行案内参照）

☆ シルクロード音楽の旅 支援協力

- ・ 8月25日 檜チャリティーコンサートホールにて（別紙参照）

☆ 財団法人全日本仏教会神奈川大会支援協力

- ・ 11月19－20日 パシフィコ横浜にて

☆ 会報発行

- ・ 34号（4月発行）／35号（8月発行予定）／36号（12月発行予定）

☆ 海外寺院ガイドのための情報収集

- ・ 冊子としてまとめる（夏発行予定）

☆ S Z Iリーフレットの作成

- ・ 新しいリーフレットの作成（年内発行予定）

☆ 国際布教支援金の運用

- ・ 希望者の募集、対象者の選定、その他

S Z I 新役員紹介

会 長

埼玉県興徳寺
住 職
福島伸悦



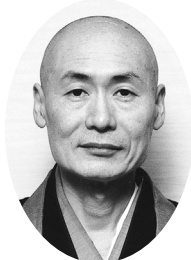
■ 相談役

静岡県宗徳院
住 職
松永然道



■ 相談役

山形県宝泉寺
住 職
采川道昭



■ 相談役

山形県般若寺
住 職
藤川享胤



■ 相談役

東京都東長寺
住 職
瀧澤和夫



副会長（会員増強委員長）

福島県天徳寺
住 職
細川正善



新たな国際布教
交流の窓口として、
また、お互いの研
鑽の場として、初
心を忘れることな
く精進して参りま
す。

副会長（国際布教師OB連絡会委員長）

東京都祥雲寺
住 職
西沢応人



海外寺院との、
より強い繋がりと、
当会のますますの
活躍を祈念いたし
ます。

副会長（国際布教支援積立運営委員長）

東京都宗清寺
住 職
飯島尚之



小さな夢が集ま
れば、大きな夢に
育ちます。先人の
夢を次代へ繋げる
には、1人ひとりの
チカラが必要です。
これからもS
Z I 活動にご支援
下さい。

副会長（情報収集特別委員長）

愛知県地蔵寺
住 職
浅井宣亮



世界各地の紛争
には、よく宗教が
絡んでいると言わ
れます。このよう
な動きとは一線を
画する曹洞禅の海
外展開を知ってい
ただく機会になれ
ばと考えています。

事務局長

神奈川県泉昌院
副住職
亀野哲也



S Z I 発足時に
おける諸先輩方の
初心を受継ぎ、S
Z I ブランド確立
に向けて、事務局
長としての1歩1
歩を着実に進んで
行きたいと考えて
います。

会 計

新潟県興源寺
住 職
田宮隆児



S Z I に関わり、
3年目となります。
この度は会計とい
う大きな責任を受
け持つことになり
ました。間違えの
ないよう、細心の
注意を払い任務に
当たります。

監 事

静岡県永明寺
住 職
加藤孝正



仏教は世界宗教
のはず。曹洞宗は
その正伝の教えの
はず。S Z I は内
向き志向の宗門人
に“喝”を入れる
存在であってほし
い。

監 事

長野県本地院
住 職
黒柳博仁



世界に広がりゆ
く法友との絆が、
より一層深く、活
き活きと結べるよ
う、微力ながら努
めさせて頂きたい
と思います。

事務局員

東京都長泰寺
副住職
大谷有為



異なる文化の融
合から、いつしか
素晴らしい文化が
生まれるかもしれ
ない。そんな夢を
持ち続けたいと思
っております。

事務局員

神奈川県梅宗寺
副住職
館盛寛行



人と人との縁こそが大切だと思っています。1人でも多くの人と、共に語り合い、共に活動できれば幸いです。

事務局員

東京都大龍寺
副住職
太田賢孝



刺激的な国際布教の現場に、私自身が多くの問題意識を呼び起こされてきました。より一層多くの方々に国際布教の現場を知っていただきたいと思います。

事務局員

宮城県城国寺
副住職
菅原研洲



国際布教の状況を国内に知ってもらうには、まだまだ多くの資料等の作成が必要とされています。そのような作業にも積極的に関わります。

事務局員

神奈川県善光寺
住職
黒田博志



行き届かないことがあると思いますが、限りを尽くして一所懸命精進いたしますので、何卒よろしくご指導くださいますようお願い申し上げます。合掌

事務局員

神奈川県正翁寺
副住職
簗保雄



引き続き「事務局役員」を務めることとなりました。微力ながらも、お手伝いできればと思います。よろしくお願い致します。

事務局員

京都府宗仙寺
寺族
細川浩代



世界各地に行くのが楽になってきた最近では、もはや日本と世界の垣根は要らないと思います。SZIが垣根を越える活動ができるよう、事務局の1人として頑張ります。

事務局員

静岡県随縁寺
寺族
内山温子



はじめまして。諸先輩方の背中をみながら、1つ1つ丁寧に努力していきたいと思っています。御指導の程よろしく願います。

布教審議委員

静岡県重林寺
住職
月出俊典

布教審議委員

静岡県法幢寺
住職
秋田弘隆

お知らせ

鳥取県總和会事務局様より、法衣・仏具を寄付していただきました。SZIからヨーロッパ国際布教総監部宛に送付させていただきましたことをご報告いたします。ありがとうございます。

天平の響き

「シルクロード・音楽の旅」のお知らせ

<http://silkroad.jpn.org>

2007年8月25日(土) 湯河原・吉祥院 檜チャリティーコンサートホールにおいて演奏会が予定されております。

伝統音楽と声明・ジャズトリオによる癒しの音楽・クラシック、ジャズ、声明、中国音楽、など、ジャンルを超越した新感覚の心地よい演奏会です。

パンフレットを同封いたしました。

申し込みは4月から行っています。皆様のご参加をお待ちしております。

寺院でのフラスタジオ展開について

静岡県法幢寺 寺族 秋田 奈美

1 静岡市法幢寺において 2000年1月にフラ教室をスタート

お寺の客殿においてフラを教え始めて7年が経ちました。当初は子供がまだ小かったこともあり、昼間の時間帯だけのレッスンで若手、中高年、子供の3クラスがありました。中高年のクラスはほとんどが檀家の方で御詠歌のメンバーでした。御詠歌を勉強していない私にとってフラは檀家さんとの交流の場ともなりました。生徒全員がおそろいのパウ（ハワイ語で“スカート”の意味）を身に着けレッスンをするという光景は今はすっかり定着していますが、当時の生徒さんはこのパウを身につけることさえ大変抵抗があったようです。

ハワイのクープナ（年配の方）が明るい色を好むのにならい、私は敢えてきれいなピンクの花柄の生地をハワイのファブリックストアで選び、中高年グループのレッスン着にしました。普段どちらかといえば地味な服を着て、目立つことをあまり好まないとしない環境に居る方々にとっては大冒険です。自分がフラを習っているという気恥ずかしさから『お寺』を隠れ蓑に家族に内緒にしてレッスンをしている人もいます。

ハワイアンを踊る以上、こころも大らかに明るい気持ちで楽しむのが基本ですからメンタルな部分から変えていくというのは欠かせないのです。そのためにはまず華やかな色のスカートで変身をして気分も軽く、いつもとは一味違う自分を発見してみるのです。

フラを踊るときはいつでもスマイルで相手を受け入れ、生かされている喜びを分かち合います。笑顔は最高の「布施」なのです。誰にでもできることです。とはいえなかなか・・・足でステップを踏みながら歌詞を手の動きで表現するフラは見た目よりも難しく感じる方も多く、動きに一生懸命で笑顔の出る幕はなかなかないのです。

2 はじめての発表会

『笑顔で踊れるようになる秘訣はひとつ。いつも笑顔でいることです。』と語りかけ、半分引いている感のある檀家さんをなかば無理やり発表会に引っ張り出しました。会場はお寺の檀家でもあるホテルを選びました。パーティールームを借りて、生バンドを入れての発表会です。初めて衣装も作り、お客様も100名ほど呼びました。お稽古をスタートして1年足らずの2000年12月。御詠歌を続けながらフラを習い、パウを着るのにも勇気がいるのにまさかムービーを着て舞台上で踊ろうとは思ってもみなかったようです。『この年になってこんな華やかな経験をさせてもらえて感謝している』と発表会終了後にしみじみ言うてくださったある生徒さんの言葉が今でも胸に残っています。翌年にはお寺の本堂でプロのギタリストをゲストにチャリティコンサートを主催し本尊さんを背にフラの披露をしました。皆様のご協力のお陰で150枚のチケットはすぐに完売しま



本年度総会懇親会にて

した。

同じ頃、2001年秋に夜のクラスをスタートするとお勤め帰りの若い女性がレッスンに集ってくるようになりました。

『お寺でフラ?!』という珍しさから地元のテレビ局からぜひ取材にとお話があり、生中継や録画とたくさんの番組に出演しました。そのたびに私と生徒さんは華やかなムービーで踊り、住職は衣装で合掌して登場。仏教の教えとフラの教えの共通性を語り、お寺でフラを踊ることが何一つ不自然なことではないとリポーターやアナウンサーが納得するのです。お寺の住職がハワイ生まれであり、海外経験の長いバイリンガルであることも興味を持たれる理由のひとつと思われます。

最近では「フラをやってお寺」と呼ばれることも多く、地元では定着しつつあるように思います。

3 フラスタジオとしての活動

フラスタジオの活動としてチャリティコンサートや老人ホームなどのボランティア、お祭りなどのイベントや発表会、コンサートと様々な舞台上で踊る機会をいただき生徒一同「アロハスピリットあふれるフラ」を目指して熱心にお稽古に励んでいます。

生徒だけでなく、舞台を心待ちにしてくださるお客様やご家族、友人の方がたのサポートが大きく、初めての発表会から全部の舞台を見てくださっているお客様も多いです。

私たちの発表会をみて『温かい気持ちになった』『心から癒され感激して泣いてしまった』『自分もがんばろうという勇気もらった』などありがたい感想をいただきます。

「自然を愛し、人を愛し、生かされていることに感謝して踊る」忍耐力、協調性、謙虚さと優しさ、つまりフラの根底を流れる「アロハの精神」を集結させた発表会で生徒全員が本当に輝いている。踊りの技術の向上だけでなく、内面的にも磨きをかけてくれるフラの魅力を実感するとともに、平和な世界のためにフラは大いに貢献できると信じています。

静岡市の区画整理事業のためお寺を新築、移転したのは2004年12月。建設委員、および役員、檀家さんのご理解を得て新しい客殿は壁一面鏡にできる斬新な造りにしていただき、フ

スタジオとしての機能も充実しました。これを機に生徒さんからは毎月施設維持費をいただくようにし、お寺の護持に協力していただくようになりました。

2006年10月の晋山・落慶法要では本堂でフラの奉納をしてお祝いに華を添えることもできました。

4 寺族としてのライフスタイル

私にとってフラは坐禅であり御詠歌でありライフワークです。縁あってお寺のお嫁となつてすぐに、寺族の通信教育を受講しました。そこで学んだお釈迦様の教えは生きる知恵に満ち、寛容で慈悲があり、底抜けに明るく私の心に響きました。一方、「よくお寺に嫁ぐ気になりましたね」などと最初の頃同情混じりに言われたのを思い出します。不自由なイメージがあるのですね。もともと「お寺の奥さんはこうあらねば」という型はないのだと思います。奥さんの歴史がないのですから型にはめようもない。縁あって寺族となった以上、大切なのはお寺で日々暮らしていくという現実のなかで、自分がいかに自分らしくハッピーでいられるか。そのためにどんなライフスタイルがあるか柔軟な思考力を持つことだと思います。お寺は住職がいなくては成り立たない。しかし寺族がいなくても存続はします。お寺には檀家に信頼され、尊敬される住職がいることがまず第一。寺族はあくまでもサポート役。寺族が自分の仕事を持つことに意義があると判断したらお寺の仕事の一部を誰かにサポートしてもらうなど柔軟な発想で対応したらよいと思うのです。どんな分野の仕事でも、自分でできない部分と他の方にお願いできる部分があるのですから。私の場合はフラを自分の天職のように感じています。仕事でなくてもヨガ、コーラス、演劇、絵手紙などのカルチャー教室でもよいし、地域のための活動など寺族が生き生きできれば何でも良いのだと思います。信念を持ち、自由な精神で活動することを心がければ時間はかかるかもしれませんが、周囲の人々も協力してくれるようになるでしょう。何か目標を持ったならば「お寺だから無理」と自らに制限を設けるより、『お寺だからできるかも』と考えてみるのもひとつの方法ではないでしょうか。

5 スタジオの現在

お寺の客殿兼スタジオでは月、火、水がフラのレッスン。また外部の教室として静岡市内、千葉市、清水と少しずつ広がりをみせています。私ひとりですることには限りがありますの



で、うちのスタジオで育ったインストラクターにも教室での指導をお願いしています。

おけいこの前にはオリ（詠唱）を皆で唱え、天からのインスピレーションを授かるよう祈ります。「体、心、魂」この三つのバランスを正しく保ち、精神に磨きをかけるスピリチュアリティがフラの根源にあります。フラは神殿や寺院、聖地で始まったのです。そうした意味で、寺院空間はフラのおけいこに適しています。年配の生徒さんは、気持ちが落ち着くのか「お寺だからまたいいのよね～」などと言ってくれます。広いスペースや駐車場などの環境条件にも恵まれています。一方、寺院である以上、仏事が優先ですから限界も出てくると思われます。将来的には専用のスタジオが必要になると予想しています。

いずれにしてもここ法幢寺が「フラ発祥の地」であり『アロハ発信基地』であることに変わりはありません。スタジオのモットーは「E Ho' omau me ke Po' okela」=Continue with Excellence

直訳すると、「常に一流であること」フラを通して心と技術を磨き、今後多くの素晴らしい人々とめぐり合っていけたら幸せです。最後になりますが、私のよき理解者でありカマイレフラスタジオ事務局長の住職、秋田ジョン弘隆と、若干12歳のひとり娘（フラ歴7年）の理解とサポートに常に感謝しています。まだまだ未熟な私の経験談ですが、少しでも何かのお役に立てればと思いお話をさせていただきました。

Mahalo & Aloha

（ありがとうございました）



秋田奈美プロフィール

10歳でクラシックバレエを始める。

青山学院卒業後、留学先でフラと出会い感銘を受ける。

Hula Halau O Napualaniにて初めてフラを学ぶ。

1992年ワシントン州シアトルにて当時商社勤務の秋田ジョン弘隆氏（現法幢寺住職）と結婚。

1995年静岡に移住し法幢寺寺族となる。1997年よりオアフ島のMichael&James Delacruzに師事しポリネシアンダンスを学ぶ。ハラウメンバーとしてホノルルのキングカメハメハフラコンペティション、ワールドインビテーショナルフラコンペティションなどに出場。

2000年静岡市長沼にて「アロハスピリットあふれるフラ」を目指してカマイレフラスタジオを設立。

2003年静銀ホールにて第1回発表会。

2005年静岡AOIにて第2回発表会を主催。コンサートを中心に舞台出演多数。現在、オアフ島のクムフラ、サニー・チン氏に師事し伝統的フラ全般および指導者としての専門的知識を学んでいる。

最近御詠歌のために作曲された南こうせつの「まごころに生きる」に振り付けをしてフラとして披露するなど新しい試みにもチャレンジ。

フラ、ハワイ、お寺の日常について書いているブログは月間4000件ほどのアクセスあり。

URL <http://kamaile.littlestar.jp>

国際布教支援金交付のご報告

前号にてお知らせした下記の2件についての交付が2007年度の総会において報告されました。

- ①アンヌ・道学・ポエラート氏への奨学金としての支援（20万の支給）
- ②ブラジル・イビラス禅光寺へ在家用応量器の実費支援（50組27万1225円）

なお、2007年度「国際布教支援金」については、3月31日現在、2か寺3人の申請をいただいております。4月23日に2007年度第1回 国際布教支援積立金運営委員会を開催いたします。

2007年度「国際布教支援積立金」のご案内

2006年度に引き続き、今年度も国際布教支援積立金の応募を受付いたします。運用細目および申込書については会報31号か、ホームページをご参照ください。

応募資格：曹洞宗の国際布教事業に携わる内外の寺院、団体、個人

支援額：年度総額100万円

問合せ：SOTO禅インターナショナル事務局

海外インフォメーション

北米アイオワ州ドチェスター竜門寺 ワインコフ彰顕老師よりSZI事務局宛に新庫院落慶のインフォメーションをいただきました。



アイオワ州デコラ地域にある農家の穀物小屋に修行の種子を撒いてから10年。土地の喜捨を受け、2004年に本堂を建立。そして本年、庫院の落慶の運びとなりました。

ここに、新庫院落慶式のお知らせができますことを誠にありがたく思っております。

日 時 平成19年6月23日(土) 午前11時より
 導師 北米総監 秋葉玄吾老師
 場 所 竜門寺

SZ | express

2006年度SZ | 活動日誌 (2006年1月1日～12月31日)

1月31日	役員会	曹洞宗檀信徒会館	9月2日	ゆめ観音アジアフェスティバル	
2月28日	役員会	曹洞宗檀信徒会館			大船観音寺
	総会・講演会・懇親会		9月3日	ゆめ観音会場片付け	大船観音寺
		曹洞宗檀信徒会館	9月7日		
4月7日	会報編集会議	東京	～14日	ドイツ普門寺ツアー、諸行事	ドイツ・普門寺
6月23日	大本山總持寺ワークショップ	大本山總持寺	9月9日	ゆめ観音反省会	大船
7月1日			9月9日	全日本仏教会との連絡会議	大船
～10日	熊本聖護寺・国際安居へ通訳1名派遣	熊本・聖護寺	10月3日	国際課との連絡会議	曹洞宗檀信徒会館
7月3日	大本山永平寺ワークショップ	大本山永平寺	10月26日	国際布教支援積立運営委員会	曹洞宗檀信徒会館
7月25・26日	夏期大学講座協力	曹洞宗檀信徒会館	11月11日		
8月30・31日	役員会	小田原	～12日	マウイ島満徳寺100周年行事参加	マウイ島・満徳寺
9月1日	ゆめ観音会場設営	大船観音寺	12月14日	編集会議・国際課との連絡会議	有楽町

会費納入者名簿

1月1日から3月15日まで

◆SZ | 会費納入者

新規会員並びにご継続ありがとうございます。
(敬称略・順不同)

JTB本社営業第一部

佐賀県	医王寺	光山修道
千葉県臼井市		佐藤信嗣
東京都品川区		土田由美子

動 静 報 告

(1月21日～4月23日)

1月21日	演奏会打ち合わせ	(檜ホール)
2月14日	役員会・定例総会・懇親会	(檀信徒会館)
2月24日	演奏会打ち合わせ	(檜ホール)
4月1日	演奏会打ち合せ	(長光寺)
4月23日	役員会・編集会議	
	・国際布教支援積立金運営委員会	(檀信徒会館)

インターネットにて随時役員会を開催しています。

S | Z | I

**ホームページ
運営中!**

SZ | では、活動報告の他、皆様との交流の場を設けております。お陰様で日本も含めて世界各国の方々にご覧頂いており、好評もいただいております。

今後より一層、情報の共有を交流の促進のために、これまでのホームページとBBS(掲示板)に加えて、SZ | のブログサイトも設けております。

<http://www.soto-zen.net/>
<http://www.soto-zen.net/blog/>

ご意見・ご質問等、スタッフ一同お待ち申し上げます。

2 0 0 7 年

S Z I 両大本山ワークショップのご案内

2007年のS Z Iワークショップは下記の日程で開催されます。總持寺におけるワークショップはどなたでも聴講できますので、是非ご参加下さい。海外での布教現状を知って頂き、相互の布教活動の活性化に貢献できればと思います。

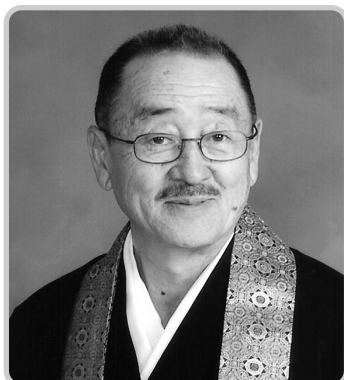
・ 總持寺

講 師 小杭好臣開教使（浄土真宗米国仏教団総長）
演 題 「如是願行」 ―私が歩んだ浄土真宗北米開教の道―
日 時 5月7日（月） 午後2時50分～
会 場 大本山總持寺（JR京浜東北線鶴見駅下車5分）
三松閣 四階 大講堂（どなたでも聴講可能です）

・ 永平寺

講師・演題は總持寺と一緒です

日 時 5月8日（火） 午後6時30分～
会 場 大本山永平寺
（内講のため、修行僧のみとなります）



講師プロフィール

小杭好臣（おぐいこうしん）

1940年 1月1日佐賀県生まれ
1962年 京都龍谷大学卒、渡米
ロサンゼルス、オックスナード仏教会駐在、
イエール大学神学部勉学
ニューヨーク、サンフランシスコ、シカゴ仏教会駐在
現 浄土真宗米国仏教団総長

問い合わせ先 SOTO禅インターナショナル事務局